夏鳥の見られるのは5月上旬までの20日間である。オオルリは5月一ぱい見る。

5. そのほか

地続きの丘陵ではホオジロ、セグロセキレイが営巣しているが、この境内に入ってきたのを見たのは1, 2羽を2, 3回だけである。ヒバリ、ムクドリを見ることもない。開けたところを好む鳥達であるからであろう。エナガは6月上旬まで見るので営巣しているかもしれない。かつては林の内に入ると海底でも歩いているような感じであったこの境内も、2回の台風によって多くの大木が倒れて、すっかり明るい林になりつつある。今春はホオジロが境内のヘリでさえずっていたが、やがてここもアカマツまじりの明るい林になる予言のように思われた。ここへ訪れる鳥の種類もしだいに変わるであろう。

なおヨタカ、アオバヅクも5月上旬にやってくる。トラツグミは1953年に吉村信紀氏によって境内に営巣したことがたしかめられている。(文献: 武内 功 1959 名古屋地方の鳥類 中部日本自然科学調査団報告第3報)

Seasonal bird-life in Nagoya city (Takeuchi, Isao)

Notes on birds found in Nagoya City are reported by division of permanent residents, wintering, spring and other visitors.

有明海のツクシガモ 西田 智

有明海に毎年ツクシガモが渡来しているのを知ったのは日本野鳥の会九州支部報「九州野鳥」(第1号, 昭. 36年)に大川市の中村元之氏が報告されているのを読んでからで、同氏によると昭和36年1月~2月に20~30羽捕獲されたとのことである。以来興味を感じ、「ぜひ観察に行きたいので、もし今冬渡来したら知らせてほしい」と同氏にお願いしておいたところ、11月中旬、野鳥の会九州支部【地図説明】有明海のツクシガモ観察地点(数字で示す)

副支部長の黒木茂氏を通して11月9日すでに渡って来た由の報を受けた。さっそく11月25日、野鳥の会大阪支部の岡本、真下、児玉、五十嵐の四氏とともに大川市の中村氏を訪ね、翌26日、同氏に有明海を案内して頂いた。

I. 26日の観察 (1961年11月) 同日は快晴、無風といった絶好の天候に恵まれ、中村氏の御尽力により借りられた漁船に一行六人が乗り込み、午前8時大野島船付場を船出して筑後川を下り有明海に向った。9時30分、(1)地点(地図参照)にて北より南へ向って飛翔中の2羽を認む。10時30分、(2)地点にて游泳中の5羽を認め、船を近づけたが他の漁船接近のため飛び立つ。11時頃、(3)地点にて上記と同一群と思われる5羽を認め、300米、200米、と船を近づけたところ、仮眠中だった群もこれに気付き、除々に泳いで遠ざかりはじめたが、この時双眼鏡をとおり嘴の赤色まではっきり認められた。さらに船を近づけ、飛び立つ寸前には約130米位であったが、同載の写真はこの時写したものである。この群を観察中、2羽上空を飛び去ったが、これは9時30分(1)地点で観察したものと同一群であろう。

II. その他の人の観察記録 中村氏から御教示頂いたものをあげてみると、

1.) 昭和33年1月3日、大川市の一ノ瀬氏が1羽を撃ち落した。(中村氏同行)

また、34年12月と35年1月、2月の3回中村氏が観察に出て3回とも出会い、多い時は50~100羽の群、5~15羽の群は5回程認めた。

2.) 昭和36年11月9日、大川市の溝田氏が有明海を一周し、(4)地点にて4羽を認め、中1羽を撃ち落した。(これは中村氏が仮標本にして、九州支部を経て黒田長礼博士に送られた)

3.) 同11月14日、佐賀市玉屋デパート横の魚屋に2羽売りものとしてでていたのを一ノ瀬氏が目撃した。

4.) 同12月19日、東京の北川、柳沢の両氏が観察された由。

5.) 同12月25日、大川市の吉川、中村両氏が、(5)地点にて4羽、(6)地点にて70~80羽を認めた。

6.) 昭和37年1月1日、中村氏が大詫間の海岸より、(7)地点にて採餌中の50羽を認めた。

7.) 同1月3日、大川市の河野、鐘ヶ江、中村の三氏が、(8)地点にて150羽の大群を認めた。

8.) 同1月15日、中村、河野の両氏と八女市の原氏が、(9)地点にて150羽を認めた。

9.) 同1月30日、大川市の本田、中村の両氏が(10)地点にて採餌中の70羽を認めた。

また、大川市で長年カモ猟の案内専門の船頭をしておられる本田氏は、「ハナガモ(注：ツクシガモの方言)は12月から『西』へ行けばいくらでも見られ、4~6羽は簡単にとれる。今年は例年より多く、東の洲(注：地図(10)地点参照)でも採餌している」と言っておられる由で、この東の洲でツクシガモが見られたのは今年が始めてだそうであ

る。

また、毎年たびたび船で出猟している柳川市の大橋氏は、「西へ行けばいくらでもおり、ざらにいますので珍しいカモではない。12月～1月28日までに50～60羽はとっているだろう」と語っておられる由である。

これらのことから考え合わせれば、ツクシガモは有明海には毎年稀ならず渡来し、特に今冬(昭和36～37年)は多かったと言ってよからう。

Ⅲ. 出水における観察例 昭和37年1月5日、筆者は鶴の渡来地として有名な鹿児島県出水市の東干拓地(下山海岸)にて3羽を認め、125 mm 望遠レンズを構えて接近したが、飛び立った時は60米位で(鉄砲ならさしずめ射程距離内)、警戒心には比較的薄いことが感じられた。翌6日も同干拓地内で見たが、13日再び訪れた時にはすでに姿はなく、ハンターに撃たれたか(同干拓地は未だ禁猟区になっていない)もしくはどこかへ飛去したものと思われる。

最後に、いろいろ御教示頂いたり、御世話になったりした中村氏に厚く御礼申し上げるとともに、同氏が「九州野鳥」(第3号、昭36年)にも書いておられるように、この美しいツクシガモは食性等の面からみても別に害のあるカモではなく、一日も早く禁鳥として保護されることを念願する次第である。

Observation of *Tadorna tadorna* in Ariake Bay, Kiushiu (Nishida, Satoshi)

Tadorna tardona has been believed to be a rare winter visitor chiefly to southern Japan. In Ariake Bay in Kiushiu, however, it is not uncommon and hunted every year. For example, a flock of 150 was observed by Mr. Nakamura on January 3, 1962. The writer, and others observed 2 and 5 birds and took photographs of the latter on November 26, 1961.

He also observed 3 in Izumi, Kagoshima Prefecture on January 5, 1962.

北九州にて見られたハチクマの渡り 西 田 智

1. はじめに

従来、日本のタカ類で群をなして渡るものとして知られているのはサシバのみであるが、筆者は1961年9月23日福岡県小倉市の足立山(600 m)で午前9時頃から午後0時35分観察を打切るまでの間に約1,500羽のハチクマが南西をさして渡って行くのを観察した。タカ類でサシバ以外に群をなして渡るものとしてハチクマのある事をここに報告したい。尚、観察当時はハチクマという事がわからず、観察した飛翔型や色彩を図示したものと飛翔型を写した写真2葉を黒田長久博士に送り、御教示をお願いしたところ「ハチクマに間違なし」との御回答を頂いて判明したものである。本稿を草するに当

ツクシガモ *Tadorna tadorna* (Photo by Y. Nishida)
(九州有明海 1961年11月26日 西田智撮影)